草津宿街道交流館
令和2年度秋季テーマ展

浮世絵から知ろう!! 戦国時代の英雄たち

主催：草津市・草津市教育委員会

歌川芳幾「太平記英勇伝 三十五 滝川左近一益」部分

江戸時代から明治時代にかけて制作された浮世絵には「武者絵（むしゃえ）」と呼ばれる、歴史や軍記物に登場する武将や合戦の場面を描いたものがあります。なかでも戦国時代を描いた武者絵は、江戸時代後期から庶民の人気を集めました。

本展では武者絵を通して、戦国時代の合戦や武将についてはもちろん、描かれている物語や伝説についても紹介します。

武者絵に描かれた英雄たち

江戸時代後期から戦国時代を描いた武者絵が人気となった背景には、寛政9年（1797）から享和2年（1802）にかけて出版された豊臣秀吉の出世物語『絵本太閤記（えほんたいこうき）』をはじめとした、いわゆる「太閤記もの」の流行がありました。この頃には寛政の改革（天明7年（1787）～寛政5年（1793））によって、庶民も倹約を強制されたことなどから、幕府に対する人々の不満が高まっていました。このような中で出版された、かつての為政者・秀吉の物語である「太閤記もの」は庶民の間で人気を博し、武者絵にも物語の場面が描かれるなどして、戦国時代を描いた武者絵も人気を集めるきっかけとなりました。

これらの動きから政権への影響を危惧した幕府は、文化元年（1804）に「太閤記もの」を発売禁止とするとともに、武者絵には天正元年（1573）以降の武将の名前や家紋を描くことを禁じ、それを破った絵師は処罰の対象としました。そこで、絵師たちは戦国時代以前の合戦や人物に置き換えて描いたほか、武将の名前を少し変えて登場させるなどし、それとなく分からせる工夫によって幕府の規制を巧みに切り抜けながら天正以後の武者絵を描き続けました。これほどに戦国時代を描いた武者絵は庶民から愛されていたようです。

①タイトル「阿根川大合戦之図」←「姉川大合戦之図」　②「笹井久蔵」←織田軍「坂井久蔵」　③「赤尾美作守」←浅井軍「赤尾美作守清綱」
④「紺田平八郎忠員」←徳川軍「本田平八郎忠勝」　⑤「真原十郎左衛門直澄」←朝倉軍「真柄十郎左衛門直隆」

阿根川（あねがわ）大合戦之図　歌川芳年（よしとし） 画　大判 3枚続　慶応2年（1866）

元亀元年（1570）の姉川の戦いを描いた武者絵です。「姉川」を「阿根川」に変えてタイトルとしていることや、各武将の名前が少しずつ変えられていることなど、幕府の規制を逃れるための絵師たちの工夫をみることができます。姉川の戦いは、現在の長浜市を流れる姉川周辺で繰り広げられた、織田信長・徳川家康が率いる連合軍と、北近江の浅井長政・越前の朝倉氏が率いる連合軍の戦いです。

太平記英勇伝

力強く勇壮な作風から「武者絵の国芳」と呼ばれた歌川国芳が、『絵本太閤記』などから挿絵や逸話を借りて武将を描き、嘉永元年～2年（1848～1849）に刊行した全50枚のシリーズ。幕府の規制を逃れるために、タイトルを南北朝時代を舞台とする軍記物『太平記』に置き換え、武将も名前を少し変えて描きました。

慶応3年（1867）には、国芳の弟子・歌川芳幾が同じタイトルで全100枚のシリーズを刊行しています。この頃には幕府の規制が薄らいでいたことから、武将名はあまり変えずにそのままのものが多くなっています。

太平記英勇伝 八十五 真柄十郎左衛門真澄

歌川芳幾 画　中判 1枚　慶応3年（1867）

朝倉家の家臣・真柄直隆を描いたものです。『絵本太閤記』では、姉川の戦いで直隆は5尺3寸（約160㎝）の大太刀をふるって活躍しますが、徳川軍に討取られてしまいます。この絵では直隆の持っていた大太刀は、さらに長い9尺5寸（約300㎝）とされています。

太平記英勇伝 七十六 森三左衛門可成

歌川芳幾 画　中判 1枚　慶応3年（1867）

織田家の家臣・森可成を描いたものです。可成は姉川の戦いの後、宇佐山城（大津市）を守っており、琵琶湖西岸を進む浅井・朝倉軍を討つため、果敢に城から打って出ますがあえなく討死します。可成は信長の小姓として有名な森蘭丸の父にあたります。

太平記英勇伝 三十一 遠藤喜右衛門春元

歌川芳幾 画
中判 1枚　慶応3年（1867）

浅井家の家臣・遠藤直経を描いたものです。『絵本太閤記』において、直経は姉川の戦いで、自身が討取ったとする武将の首を持参して信長の本陣に潜入し、信長を討ち取ろうとしました。しかし、寸前のところで信長の家臣・竹中重矩に見破られ、討取られたとされています。

描かれた明智家

戦国時代を描いた武者絵には、天正10年（1582）本能寺の変で主君・織田信長を討った明智光秀についても描かれており、娘婿である明智秀満や光秀の妻・娘など、身内についても描かれています。

なかでも本能寺の変後の山崎の戦いで、光秀が羽柴秀吉に敗れたことを知った秀満が、占拠していた安土城（近江八幡市）から光秀の城である坂本城（大津市）へ向かう際に、湖水に馬を乗り入れて琵琶湖を渡ったという伝説は様々な絵師により描かれました。また、坂本城落城に際しての、秀満の最期の活躍・敵軍への宝物引き渡しについても描かれています。

太平記英勇伝 二十七 明智日向守光秀

歌川芳幾 画　中判 1枚　慶応3年（1867）

明智光秀の前半生については明らかではありませんが、室町幕府15代将軍・足利義昭に仕えたのち、織田信長の家臣となりました。信長の下では数々の活躍により信頼を得て、近江滋賀郡を与えられて坂本城を築城したほか、丹波一国を与えられ丹波亀山城（京都府亀岡市）・福知山城（同福知山市）を築城し、所領を治めました。

しかし天正10年（1582）謀反を起こし、本能寺の変で信長を討ちますが、山崎の戦いで羽柴秀吉に敗れ、坂本城へ戻る途中に横死しました。

太平記英勇伝 四十九 明智左馬助光春

歌川芳幾 画　中判 1枚　慶応3年(1867)

光秀の娘婿・明智秀満が描かれています。武将名が「明智左馬助光春」となっていますが、この名前は後に誤って広まったものと考えられています。光秀が福知山城を築城すると、秀満はその福知山城を光秀から任され城主となりました。

この絵には『絵本太閤記』より、秀満が狩りに出かけた際に白狐をみつけ、これを撃とうと銃を構えている場面が描かれています。

明智左馬之助光春 湖水馬歩唐崎松之図

小林清親 画　大判 3枚続　明治時代初期

本能寺の変後、明智軍が占拠した安土城を守っていた秀満は、山崎の戦いでの光秀の敗報により、明智軍の拠点である坂本城へ向かいます。しかしその途中、羽柴軍の先鋒である堀秀政軍が大津で待ちかまえていたことから、これを避けるため秀満は琵琶湖に馬を乗り入れ、唐崎まで泳いで渡ったという伝説を描いたものです。

大津坂本城落城之図

歌川芳虎 画　大判 3枚続　明治3年(1870)

元和頃(1615～1624)に書かれた『川角太閤記』によると、坂本城を落城させる決意をした秀満は、城にあった宝物を「これらは天下の名品であるから、落城とともに失われるべきではない」と夜具に包んで天守から落とし、敵である堀軍に託したといいます。

この絵では両者が広間で対峙していることから、おそらく引渡し前に宝物を披露している様子を描いたものと考えられます。引き渡し後、秀満は城に火をかけ自害しますが、天下の名品である宝物を敵方に託してこの世に留めおくという決断は美談として後世に伝わり、武者絵にも描かれました。

描かれた秀吉と賤ヶ岳の戦い

山崎の戦いで明智光秀を破り、信長の後継者候補に躍り出た羽柴秀吉は、同じく織田家重臣の柴田勝家と対立し、天正11年(1583)の賤ヶ岳の戦いへと発展します。この戦いでは加藤清正など、後に「賤ヶ岳七本槍」と称される秀吉子飼いの将たちの活躍などもあり、羽柴軍は勝家を敗走させます。この後、勝家を自害に追い込んだ秀吉は、四国や九州・関東以北の大名を屈服・滅亡させ、天下人にまでのぼりつめます。賤ヶ岳の戦いでの勝利は、彼の生涯を語るうえで欠くことのできない重要な合戦です。

月百姿 志津ヶ嶽月

歌川芳年 画　大判 1枚　明治21年(1888)

「月百姿」は歌川芳年による、月をテーマとして故事を描いた全100枚のシリーズです。

この絵には湖畔において挟箱に腰掛け、法螺貝を吹く秀吉が描かれています。羽柴軍と柴田軍は賤ヶ岳周辺にて対峙していましたが、途中、美濃での織田信孝の挙兵を知った秀吉はそちらに向かいます。その間に柴田軍によって羽柴軍の砦を攻められてしまったことから、秀吉はすぐさま50kmあまりの距離を5時間でとって返して賤ヶ岳に戻り、勝家との決戦に挑みました。

賤ヶ岳七本槍

賤ヶ岳の戦いで活躍した秀吉子飼いの武将たちが、後に「賤ヶ岳七本槍」と呼ばれました。7人には福島正則・加藤清正・加藤嘉明・脇坂安治・平野長泰・糟屋武則・片桐且元が挙げられていますが、その他に桜井佐吉・石川兵助も7人と同様に秀吉から感状を得ています。

賤ヶ峯合戦之図

歌川国芳 画　大判 3枚続　江戸時代後期

『絵本太閤記』に書かれている、賤ヶ岳七本槍の一人・加藤清正の活躍が描かれています。清正は討取った敵の首をいくつもぶら下げた笹を携え、戦場にて敵兵をおびえさせたといいます。この絵で清正は「藤原正清」とされており、左側に描かれている「濱地将監」は柴田軍の「山路将監」です。

瓢軍談五十四場 四十六
賤ヶ岳七本鑓の内 捨作萬一郎高名

一英斎芳艶 画
大判 1枚　元治元年(1864)

「瓢軍談五十四場」は一英斎芳艶による、『絵本太閤記』の逸話を描いた全55枚のシリーズです。

この絵には賤ヶ岳七本槍の片桐且元・加藤嘉明が活躍する場面が描かれています。且元は「畑切捨作員元」として、一突きの槍で敵将3名を一気に仕留めています。嘉明は「佐藤萬一郎」として、弓を持った敵将に向かっていく様子が左上に描かれています。

太平記英勇伝 毛受惣助家照

歌川国芳 画
大判 1枚　嘉永元年～2年(1848～1849)

柴田勝家の家臣・毛受勝助家照を描いたもので、『絵本太閤記』にある元亀2年(1571)伊勢長島攻めにおいて、一揆勢に奪われた勝家の馬印(戦陣で大将の居場所を示すもの)を取り戻そうと一人敵中に入り、見事に奪い返す場面が描かれています。

家照は賤ヶ岳の戦い終盤に勝家を逃がすため、その身代わりとなって勝家の馬印を掲げて敵の大軍を相手に奮戦しますが、あえなく討死しました。

2020年9月19日
草津市立草津宿街道交流館
〒525-0034 草津市草津3丁目10番4号
TEL.077-567-0030　FAX.077-567-0031
http://www.city.kusatsu.shiga.jp/kusatsujuku　Facebook:kusatsujuku

＊草津宿街道交流館が行う草津宿街道交流館令和2年度秋季テーマ展「浮世絵から知ろう！！戦国時代の英雄たち」の解説リーフレットとして作成したものです。
＊掲載資料はいずれも草津市蔵・中神コレクションです。